HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	入居者の屋外外出行動とユニット間交流 ： グループホームにおける環境と人間行動の相互作用について（その6）
Author(s)	戸所, 真聡; 隼田, 尚彦; 奥, 俊信 他
Citation	学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 2004, 355-356
Issue Date	2004-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38412
Rights	日本建築学会
Type	journal article
File Information	mori-22.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本建築学会大会学術講演梗概集
(北海道) 2004年8月

入居者の屋外外出行動とユニット間交流

-グループホームにおける環境と人間行動の相互作用について(その6)-

正会員 ○戸所 真聡*1
同 隼田 尚彦*2
同 奥 俊信*3
同 森 傑 *4

痴呆性高齢者 グループホーム 外出行動
複数ユニット

1. 目的

本稿では個別の事例から入居者の外出について考察する。また、複数ユニットの効果としてユニット間の交流について分析を行う。

2. 調査概要

2-1. 対象施設概要

GH「Mo」 開設－2000年3月

H館・B館・Y館の隣接する3棟で構成され、各館は冬季にも利用可能な屋根付の路地でつながれている。

GH「Ho」 開設－2002年4月

1階と2階の2ユニットが、季節を問わず利用できる「庭」として計画された吹き抜けのアトリウム空間によってつながれている。

2-2. 調査方法

屋外外出追跡調査

GH「Mo」・「Ho」を対象に4日間(2003.08.11～8.14、8.15～8.18)9:00～17:00に調査を行った。入居者の外出時に行動追跡し、後方からのビデオ撮影によって、入居者とスタッフの行動を記録した。調査対象者の概要を表1に示す。

3. 個別事例から見た屋外外出行動

屋外外出行動追跡調査から外出回数が多く見られた事例の外出行動について考察を行う。

C3氏(図1)

C3氏はパターン1・2の「完全に一人で外出」を7回行っていた(一人で外出は全外出19回中11回)。このことから、C3氏は自分の意志による自発的外出が中心であると考えられる。外出先で最も多かったのはアトリウム空間の椅子(「椅子A」)で10回である。パターン2・3のように庭空間や周辺地域へ外出する場合でも、その前後に「椅子A」で休憩していることから、「椅子A」がC3氏の外出の拠点となっていることがわかる。

D2氏(図2)

D2氏は全外出42回中パターン1・2の「一人で外出し、スタッフと帰宅」を19回行っていた。これらの外出では帰宅願望も見られ、続いて解消のために周辺地域へ散歩に出かけていた。D2氏の外出先で最も多かったのは「デッキ」の16回である(「ベンチD」含む)。デッキにある「ベンチD」はスタッフの誘導で、D2氏の気分転換に利用していた。パターン3はスタッフの見守りでD2氏が先導する入居者主体の散歩である。D2氏は帰宅願望や外出欲求から自発的外出をしており、スタッフの見守りによってアトリウム空間や庭空間で外出している。

表1. 屋外外出追跡調査対象者概要

GH	ユニット	性別		移動方法				痴呆度		
		男	女	独歩	杖歩行	手引き歩行	車椅子	軽度	中度	重度
Mo	H館	2	6	5	0	1	2	2	2	4
	B館	0	8	3	1	2	2	3	3	2
	Y館	1	7	6	1	1	0	4	4	0
Ho	1階	1	7	4	2	1	1	1	5	2
	2階	2	7	7	0	0	2	2	6	1

4. ユニット間の交流

GH「Mo」・「Ho」はユニットを独立した「家」と捉え、敷地内に複数の「家」があることで、庭空間が地域の一部となるように計画された。屋外外出追跡調査から見られた交流回数を表2、3に示す。GH「Mo」ではスロープやB・Y館玄関付近で外出する入居者と帰宅する入居者がすれ違い、挨拶を交わしていた。東屋ではベンチで休憩している入居者と散歩帰りの入居者が合流し、会話をしていた。B館とY館の交流がH館との交流と比較し多く起きていた。これは、ユニット玄関が向かいあっていること、路地・東屋を空間的に共有していることが影響したと考えられる。GH「Ho」では庭空間で挨拶、アトリウム空間の椅子で会話する交流をしていた。また他ユニットの訪問も行われていた。

表2. ユニット間の交流回数(GH「Mo」)

場所	スロープ付近			東屋			B・Y館玄関前			合計		
交流したユニット	H館-B館	H館-Y館	B館-Y館	H館-B館	H館-Y館	B館-Y館	H館-B館	H館-Y館	B館-Y館	H館-B館	H館-Y館	B館-Y館
回数	1	1				2			2	1	1	4

表3. ユニット間の交流回数(GH「Ho」)

場所	庭空間	アトリウム1階	他ユニット 1階→2階	他ユニット 2階→1階	合計
回数	2	4	1	3	10

5. まとめ

個別事例から安全な庭空間は入居者の自発的外出の場となることが確かめられた。また、各入居者に個別に対応した外出方法をとるために重要であると考えられる。ユニット間の交流は、ユニットのつながり方の違いによって交流回数に差が見られ、空間を共有することが大きく影響していた。また滞在できる空間では会話等の内容の濃い交流へと発展していた。

参考文献

1)隼田尚彦ほか、共用空間における消極的参加の場に関する考察、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp261-262、2000
2)浅野倫子ほか、共用空間の選択性と玄関の施錠が入居者の生活に及ぼす影響、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp1077-1078、2001
3)浅野倫子ほか、共同生活における人間関係の形成と共用空間のあり方、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp291-292、2002
4)戸所真聡ほか、入居者の行動と外部空間のあり方、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp293-294、2002

Outside Activities and interchange of the Elderly with Dementia
-Environment-Behavior interaction at a Group home for People with Dementia (Part6)-

TODOKORO Masato, HAYATA Naohiko, OKU Toshinobu, MORI Suguru

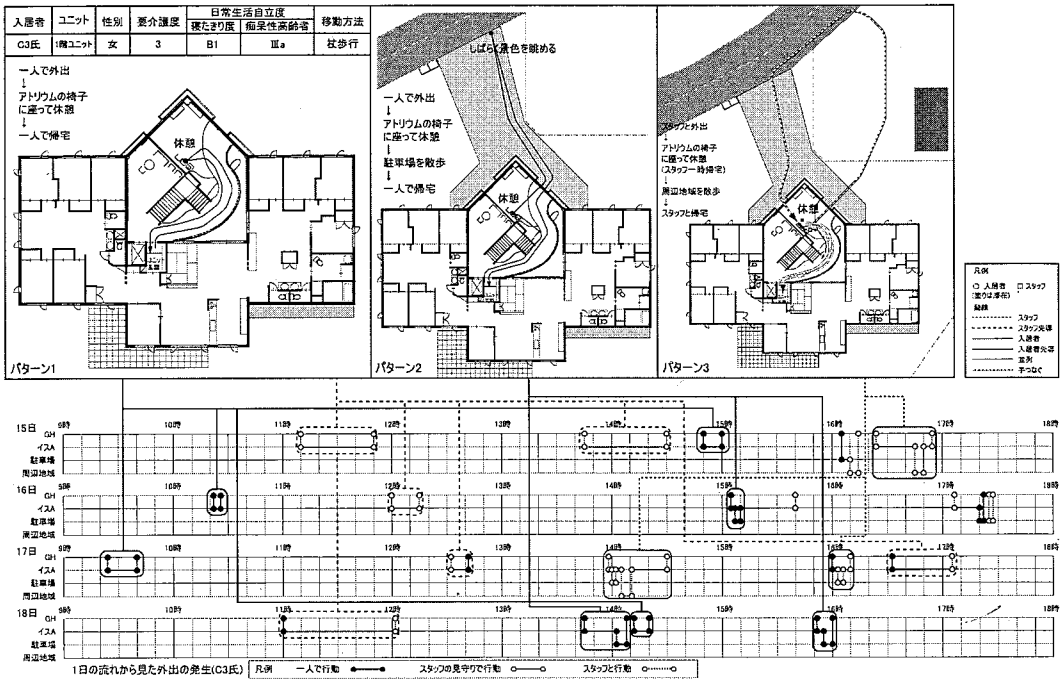

図1.1 日の流れから見た外出の発生と外出の様子(C3氏)

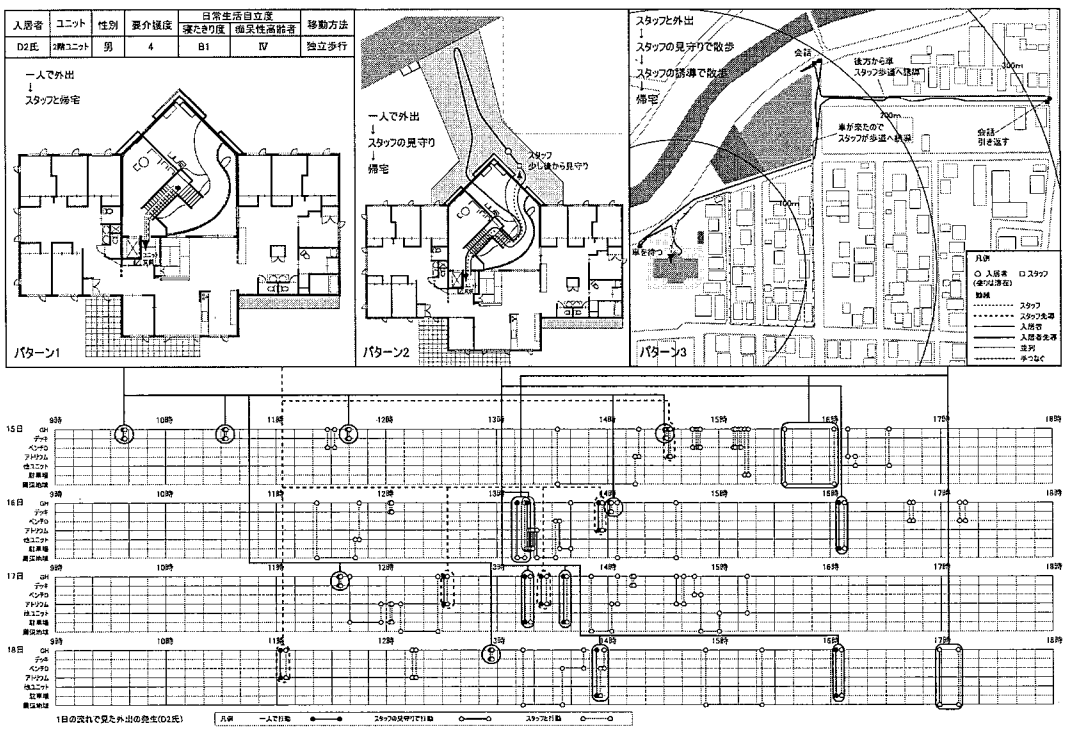

図2.1 日の流れから見た外出の発生と外出の様子(D2氏)

*1 戸田建設株式会社・修(工) TODA CORPORATION, M. Eng.
*2 北海道情報大学情報メディア学部助教授・博(工) Assoc. Prof., Faculty of Information Media, Hokkaido Information Univ., Dr. Eng.
*3 北海道大学大学院工学研究科教授・工博 Prof., Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ., Dr. Eng.
*4 北海道大学大学院工学研究科助手・博(工) Inst., Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ., Dr. Eng.